

## 世界の橋並み



講師 松村 博 氏

1944年大阪市生まれ。

京都大学大学院修了後大阪市に勤務し、橋梁課に長く勤務。その後、計画局都市計画課長、大阪市都市工学情報センター理事長、阪神高速道路（株）監査役などを歴任。

「大阪の橋」、「日本百名橋」、「橋梁景観の演出」、「世界の橋並み」などの著書の他、橋梁工学、都市景観、土木史などに関する論文・評論などを学会等に多数発表。

皆さま、こんにちは。松村博でございます。過分のご紹介、ありがとうございます。早速ですが、「世界の橋並み」という題で1時間ばかりお話をさせていただきます。

「世界の橋並み」というのは聞き慣れない言葉だと思いますが、世界の特定の地域、都市を見てみますと、たくさんの橋が架かっていて、それぞれに個性があつて、橋を群として捉えると、その地域の特色が分かるのではないかとということで、まとめてみました。本日はたくさんの写真を用意しましたので、橋とは何かということをお考えいただく材料にさせていただければありがたいと思っています。

### 1 橋は「風土」を背負っている

橋はその地域、都市の「風土」を背負って成り立っているのではないかと考えています。風土というのが少し捉えにくい言葉だと思いますが、自然条件、社会条件、歴史的な条件の総合として醸し出される雰囲気のようなものではないでしょうか。橋もその風土をつくる一つの要素としての役割を果たしているように思います。それを「橋並み」と名付けています。以下では、いろいろな地域の橋をご紹介します。

### 2 民族と独自の文化

特定の民族、地域で特徴的な橋並みをいくつかご紹介します。

#### 1) 中国・トン族の風雨橋

まず、風雨橋ですが、中国の広西チワン族自治区にあります。この省の有名な都市、桂林から車で3時間ぐらいで到達できるようなところに、侗（トン）族という少数民族が暮らす地域があります。



程陽(永濟)橋

その侗族の人々が、このような立派な屋根付きの橋を架けております。この橋は程陽橋というこの地域独特の屋根付き橋で、風雨橋としては最大の規模をもっています。4 径間で 5 つの楼亭のそれぞれの屋根の形が違っている非常に珍しい形の橋です。



合龍橋(1920)

その橋から歩いて行ける範囲に、長さ 50 メートル程度の合龍橋や普濟橋があります。

それぞれの橋の中は、写真のように、通路の両側にベンチがしつらえられて、大勢の人が川風に吹かれながら休んで、昼下がりのひとときを過ごしているという風景が見られます。ですから、人が渡る機能を持っているとともに、橋の上は憩いの場であるということです。このよ



普濟橋内部



冠洞橋内部

うな橋の一角には、われわれが見たことがないような、地元の神様がまつられていて、信仰の場所でもあります。

巴団橋はまた違う谷にあるカンチレバー（片持ち梁）構造の橋です。橋台、橋脚の上に何本ものね木を2段に重ねまして、その上に主桁を並べています。かなりたくさんの木材を使って橋の上部構造をつくっていますが、どの橋も構造は同じようなものです。



巴団橋構造

橋の亭の部分は何重かの屋根が付いていますが、中には天井は張られていません。写真のように、がらんどろで、屋根の瓦まで下から見通せる構造ですから、館のような部分は飾りと言ってもいい



巴団橋(1910)

ですし、構造的に言えば、おそらく橋脚や橋台の上に大きな屋根付きの館を置いているということは、カンチレバー構造のカウンターウェイトの役割を果たしているのではないかと思います。



普濟橋小屋組

風雨橋の意義を整理してみますと、集落の入口に位置しており、各集落へ通じているところに架かっていまして、その集落を象徴するような役割を持っています。村人の交流も、先ほどの写真のように、憩いの場であり、舞台として踊りを披露するような場であったりといった、公共的な空間として使われています。若い男女の語らいの場である「花橋」という粋な名前もあるようです。

もう一つ、風雨橋と同じように、集落のシンボルとして「鼓楼」という建物があります。

写真のように、何重かの屋根を持った塔が各集落に建っています。



平流村鼓楼

これも、それぞれデザインが違って、その集落特有のデザインになっています。橋は、信仰の場で

もあります。橋そのものが信仰の対象と言えるかもしれませんが、祖先神がある季節になると、この橋を渡って村へやってきて、子孫に転生するという信仰があるようです。

それから、集落の非常に場所のいいところに橋を架けて、その気を集落に蓄える、風水の考え方もあります。

ちょっと見たことがないような神様が飾られて、お釈迦様の誕生仏のような格好ですが、上に「風調雨順」と書かれています。



橋の中の神像

全てが順調にいくという意味のようです。ここから「風雨」を取って風雨橋という名前が生まれたといわれていますが、どうもそれは後付けのようです。風雨橋

という言葉は、どのように生まれたかは、はっきりはしていませんが、わりあい最近の言葉のよう

であります。こういう橋は村人の寄進、お金を出したり、労働報酬ということでつくられるわけですが、今で言う公共事業への奉仕によって、個人また家の功德を積む。それがひいては御利益をもたらすと考えられています。

## 2) アンコール王朝時代の石橋

カンボジアにアンコール・トムという遺跡があります。カンボジアには9~10世紀ごろから数百年栄えた王朝があり、その王朝が築いた立派な石造りの寺院や彫刻の写真などをご覧になったことがあると思います。

その王朝の最盛期に、当時の国道のようなものが整備され、その道路の主要なところに大きな石の橋が架けられています。小さな石橋もたくさんあって、道路整備によって多くの橋が架けられていますので、それを少しご紹介します。

これはシムリアップという町の近くから東の方へ延びている、プノンペンへ行く道路に架かっているスピアン・プラプトゥスという橋です。

スピアンというのは、クメールの言葉で橋という意味ですので、プラプトゥス橋です。石造りの非常に頑丈な橋です。



スピアン・プラプトゥス

この橋の構造は、ご覧のとおり、疑似アーチで、



スペイン・プラプトゥスの細路構造

石をはねだしながら、もたれかからせるようにつくったものですから、あまり大きなスパンが取れません。それで、橋脚の幅とほぼ同じような幅しか水流が抜けないという、河積阻害率の大きな橋です。

橋の上には立派な欄干があります。これはナーガという、9つの頭を持ったヘビの彫刻です。その真ん中に仏様が彫刻されていたのですが、削り取られています。



ナーガ

これはまたあとでご紹介します。先ほどのプラプトゥス橋とは別の道路にスピアン・タ・オンという橋があります。30~40メートルの橋ですが、ラテライトという非常に固くてもろい石でつくられています。



スピアン・タ・オン

かなりの急流で水切りのようなものが付けられています。上流側では石がかなりすり減っている様子が見られます。かなりの急流が石を削り取っている様子が伺えます。この橋のたもとには、ナーガの光背を持った仏の像があります。これはきれいに仏の姿が残っています。



仏の像

アンコールでは、非常に立派な石造の構造物、彫刻がつくられているわけですが、基本的にアーチ構造はありません。全部疑似アーチで、石を少しずつ前へ積んで、最後はもたれかからせるようにした構造ですから、大きなスパンは採れません。

ですから、ヨーロッパの寺院建築のような広い空間を持っている構造物は見当たりません。橋もそういう構造的な制約があり、河積阻害率の高い橋しか生み出せなかったと考えられます。雨季になると非常に大きな水量が流れて、上流側は石が大きく削られていきます。

スペイン・トップ



上流側



下流側

簡単にまとめますと、石橋はアンコール・トムの

の王宮のあったところから約100キロ以内に分布していて、そのあたりが王国の支配の地域だと考えられます。基本的にはアーチ構造がないので、河積阻害率が大きな橋になります。おそらく雨季には、橋の上下流で1メートル近い水位差が生じるのではないかと考えられます。そのために大きな水圧が橋にかかると思われれます。一説では、橋が堰の役目を果たしているのではないかとありますが、見たところ、堰の施設は見当たりません。非常に水位差が大きいので堰の役割をしているのではないかと誤解をした人が言い出した説ではないかと私は思っています。

先ほど、9つの頭を持ったナーガに守られた仏の像が削られている橋をご紹介しましたが、アンコール王朝では、仏教を信仰している王様と、ヒンズー教を信仰している王様があり、代が代わると信仰の対象を変えるという特徴があります。

この石橋がつくられた12~13世紀のころは、ジャヤヴァルマン7世という王様が支配していた時代で、そのときは仏教を広めたということで、橋にまで仏の像をつくりました。しかし、その後、ヒンズー教を信仰する王様の時代には、廃仏毀釈が起こって、仏像をずいぶん壊したという時代もありました。そのときにプラプトゥス橋の仏像が削られたのではないかと考えられます。

### 3) イスタンブールの橋

次に、イスタンブールのお話を少しします。イスタンブールは、ご承知のとおり、4世紀にローマの都が移って以来、東ローマ帝国の首都になります。それが1000年続き、その後、オスマン帝国によって滅ぼされて、オスマン帝国が約500年続いたという、非常に古い歴史を積み重ねた町ですが、まさに東西の文明の十字路のようなところですよ。

オスマン帝国の最盛期、16世紀ごろにシュレイマン1世という偉大な王様が領土を最大に広げます。そのときに活躍したのがミマール・スイナンという建築家です。

この人の銅像が建てられています。たくさんのジャーミイ、つまりモスクを建設したり、そのほかの宗教施設もたくさんつくっていますし、王宮以外のいろいろな建築物をつくっておりますが、非常に数奇な運命をたどった人で、



ミマール・スイナンの銅像

40歳を過ぎてから本格的な建築に携わって、約50年間、90歳まで元気に活躍して、シュレイマン1世の信頼も厚く、たくさんの建築を造りました。

その1つに橋があり、エディルネ街道という、イスタンブールからエディルネという町のほうへ通じている当時の幹線道路に架かっている橋を建設



シュレイマン1世橋

しています。その街道は、ギリシャから、シュレイマン1世のときにはハンガリーまで遠征していきますので、道路沿いにたくさんの橋を架けています。

イスタンブールの町はボスポラス海峡に隔てられて東西に分断されたような形ですが、現在はボスポラス大橋が架かって以来、3つの大きな吊り橋が完成していきまして、東西分断というような形はないわけですが、20世紀までは東西の文明の十字路といいながら、交通的には船でしか渡ることができませんでした。イスタンブールの中心からずっと東のほうへも街道が整備されています。



ボスポラス橋

もう一つ、スイナンが手掛けた橋では、水路橋を整備しています。イスタンブールは水に非常に苦勞をしていたようで、ローマの時代から水路橋を架けて、イスタンブールに水を供給するシステムをつくり上げていたわけです。



ウズン水路橋

オスマン帝国の時代にも町の北のほうにある森を開発して、ダムをつくって、そこから水路でイスタンブールまで水を運んでくるという、水道システムをつくっています。おそらくローマ時代のものを改修してつくったのではないかと思います。その水路計画もスイナンがやったということで、ずいぶんいろいろな事業をやっております。

#### 4) エスファハーンの橋



イスファハンの主な石橋

イランのエスファハーンの話をしたしたいと思います。エスファハーンという町は、

町の真ん中をザーヤンデ川という川が流れており、大変美しい町です。ザーヤンデ川は、北のほうの4000メートル級の山々の雪解け水を流しており、エスファハーンを通過して、最後は砂漠の中に消える川ですが、この町のところは、写真でも見てい



ザーヤンデ川マルナン橋

ただけるように、非常に水量豊かな川です。ところが、最近はかなり水利用が増えて、水が1滴も流れないシーズンがあるとネット上には出てきまして、町の風景もここ数年は変わってきているのかなと思います。

エスファハーンには、現在は10橋の橋が架かっていますが、古い橋が5橋ありまして、その代表的なものがスイ・オ・セ橋です。スイ・オ・セというのは33という意味らしいのですが、アーチが



スイ・オ・セ橋(1600年)

33個あるということで、その名が付いたといわれています。橋の一部が喫茶店となっており、非常に暑いところですから、涼しい中でお茶を楽しんでいる人たちが見られます。

この町は、王朝の都があったということで立派なモスク、王宮が残っています。

写真のエマーム広場にはモスクもありますし、周辺には学校やその他たくさんの商店、市場のようなところもありまして、複合的な施設で、真ん中が広い公園になっていまして、市民が憩



エマーム広場

いの場として使っています。

このエスファハーンを代表する橋の1つにハージュ橋があります。下がアーチ構造で、上にもアーチ構造がありますが、これは屋根があるわけではなくて、通路になっています。中心部に立派なタイルで装飾された部屋があります。昔は王族がここからの風景を楽しんだといわれています。この橋は交通路としての役割を持っておりますし、堰、すなわち水理施設としても使われています。

これはハージュ橋の上流から見たところと、下流から見たところですが、水位差が2メートルほどありまして、ここに堰が設けられています。ここでせきとめた水を市内のほうに送る水理施設につながっています。



ハージュ橋(1655)の上流側



ハージュ橋(1655)の下流側

下の写真のように、夕暮れ時にはたくさんの市民が涼を求めて三々五々集まってきて、ひとときを過ごしている風景も見られます。こういうふうにはいろいろの役割があります。

橋の上は横から見ると屋根付きのように見えますが、屋根ではなく、強い日差しを遮るような、強い風をやわらげるような壁になっています。ところどころ水面側に出ることもできるという造りです。



スイ・オ・セ橋の橋上

古いものでは、3世紀、つまりササン朝ペルシヤの時代に架けられた橋も修復されて残っています。町の歴史を感じさせてくれるものです。



シャフレスターン橋(3c~7c)

### 3. 古代、中世の文化遺産

次に、古代から中世に架けられた橋をご紹介します。

#### 1) ローマ・テベレ川の橋

古代の橋といえば、ローマにはかなりたくさん架かっておりまして、ローマの中心部をテヴェレ川が流れていますが、20数橋あるうち5、6橋がローマ時代に起源を持つ橋で、元のまま現存しているものもあります。このように壊れてしまった橋も見られますが、現役の橋として使われている橋もあります。



壊れた橋

いくつか紹介しますと、ファブリチオ橋という



ファブリチオ橋(BC. 62)

のは、川の真ん中に島のあり、病院があつて、昔はサンクチュアリのような場所だったようですが、そういう場所への通路として架けられた橋です。これはかなり古代の状態を残しているといわれています。

サンタンジェロ橋は有名ですが、後世に伝わったものが、かなりの規模の河川改修で、両側は改変されています。真ん中の部分は古代の状態をよく残しているといわれています。



サンタンジェロ橋(130年代)

橋の欄干に天使の像がありますが、キリストの聖なる道具を捧げ持つ天使の像で、これはわりあい新しく、17世紀に立てられたといわれています。



天使の像

サンタンジェロ橋が架けられたのは、130年代、ハドリアヌス帝の時代です。帝の一族の墓にお参りに行くための参道として架けられたといわれていますが、その後、長年の間使われてきました。

西ローマ帝国が滅びたのちは、統一国家がなかったのですが、1870年代によりやく統一国家ができました。それ以降、ローマが首都となって、本格的にインフラ整備が行われて、たくさんの橋が架けられます。



ヴィットリオ・エマヌエル2世橋(1911)



レジーナ・マルゲリータ橋(1891)



ガリバルディ橋(1888)

その多くが現在も使われているわけですが、ヴィットリオ・エマヌエル2世橋、その後の名前のレジーナ・マルゲリータ橋、ガリバルディ橋など、当時、イタリアの統一に貢献した人々の名前が付けられているのが特徴です。これらの橋のデ

ザインを見ますと、ローマ時代のデザインを思い起こさせるようなデザインになっておりまして、イタリア、特にローマは、古代のローマのことを意識して町のデザインが考えられていることが分かると思います。

## 2) ブリュージュの橋

ベルギーのブリュージュという町があります。この町は中世に城壁都市として整えられて、商業の町として発展します。この町は運河で囲まれており、ここから海のほうへ通じる運河があって、舟運によって栄えた町です。12世紀ぐらいから町はあるようですが、橋としては14世紀のものが一番古いといわれています。1300年代に架けられた橋がかなりあります。石橋がたくさん見られる町ですが、17世紀、18世紀になっても、よく似た景観の石橋が架けられたことが分かります。町並みを守っていくということを意識してきたこととなります。

ブリュージュという町の名前は、フランス語読みでありまして、地元ではブリュッヘと呼ばれています。ここはオランダ語圏のようで、オランダ



スリューテル橋(1331)

語では橋をブルフというのですが、その複数形ですから橋がたくさんある町という意味だと一般には解釈されているのですが、どうもそうではなくて、もっと古い地名を見ますと、Bryggia や Rugia という地名が変化して、ブリュッヘという町の名前が生まれたといわれています。一般に橋の町だからブリュッヘといっているのは間違いのようだと、ある本には書いてありました。

町の周辺には今も舟運がありまして、比較的大きな船も入っているようで、町の周りの運河には可動橋も架けられています。



コンチェット橋(2002)

歩道橋もつり下げられて、持ち上げられるような構造になっていて、かなり背の高い船も通れるようになっています。

## 3) ヴェネチアの橋

中世の町として、町並みが非常によく残ってい

るのがヴェネチアの町です。ヴェネチアの本島といわれているところは、細かく見ると100ほどの島に分かれておりまして、それぞれ運河で隔られているわけです。その運河を渡るために400もの橋があるといわれておりまして、小さな橋がたくさん架けられています。

町が数百年にわたってつくり上げられていくわけですから、当然、開発時期の違いで道が真っ直ぐ通っていないところが、かなりあります。斜めに橋を架けなければいけないような場所が何カ所かあって、ポンテ・ストルト、つまりねじれた橋



ねじれた橋(筋違橋)

といわれているようなものがいくつかあります。日本語で言うと、筋違橋となるのでしょうか。そういう町の発展の歴史を表している橋をいくつか、ざっと地図上で数えてみましたら、5、6橋は見つけたのですが、もっと多くあるかもしれせん。

ヴェネチアの中心にはZ型のカナル・グランデ、運河というか、海によって島は大きくは2つに分かれているのですが、最近もう一つ橋が架かりましたから、現在は4つの大きな橋がありまして、最も古いのがリアルト橋という屋根付きの立派な



リアルト橋(1592)

橋です。16世紀終わりに完成しました。それまでは木の橋で、真ん中は船が通れるようにはね

上げの構造になっていたようですが、現在では背の高い石のアーチが架かっています。

ため息橋と呼ばれる橋があります。嘆きの橋と



ため息橋

もいわれていますが、ドゥカーレ宮殿から隣の建物に移動するためにつくられました。ドゥカーレ宮殿には裁判所もありまして、裁判で有罪になった人がこの橋を渡って、こちらにある牢屋に収容されるときに、この世の

見納めかということのため息をついたということから、ため息橋という名前が付いたといわれています。

カナル・グランデに架かっている橋で、有名なアカデミア橋です。木橋ふうになっています。



スカルツィ橋(1934)

アカデミア橋(1986)



リアーティ橋(1688、1794修復)

アルセナル橋(1938以降)

アルセナルというのは、ヴェネチアの造船所のことです。ヴェネチアの海運力を支える船をつ

つったところ。ちょっと変わった木の橋が架かっています。



プーニ(げんこつ)橋

ヴェネチアのちょっと変わった橋をご紹介します。プーニ橋(げんこつ橋)といいますが、15

～16世紀でしょうか、ヴェネチアの人々は、日にちを決めて、この橋を巡って争いをや

った。暴力を伴った、一種のお祭りのようなものをやりまして、げん

こつを振るって相手方を追い落とすという儀式的な小さな戦争を繰り広げたといわれています。

エスカレートしてくると、こん棒とかナイフを持ちだして、死者も出るほど過激なものに変わ

っていきました。日本で言えば、中世に、つぶて合戦といって、石を投げ合って模擬戦争のような

ことをしました。子どもだけではなくて、大人もやっていたわけです。殺伐とした尖った時代には、

そういう行事もあったようです。

テッテ(おっばい)橋といいますが、ヴェネチ

アには大勢の娼婦がいたといわれており、その娼婦が男を誘うところということで、その名が付いたとい

われています。

モーリ橋のモーリというのは、ムーア人のこと

です。ムーア人とは、北アフリカから来たイスラム教徒の商人ですが、このあたりにムー

ア人の貿易商がかなり住んでいたといわれています。



テッテ(おっばい)橋



モーリ橋

ジェズイーティ橋は、近くに大きな教会があり、そのキリスト教会の名が付けられています。



ジェズイーティ橋

この橋を、少し時間をかけて観察して

いますと、手すりが付いているのですが、お年寄りが杖をつき、手すり

を持ちながら、階段をえっちらおっちら上っていく。また、時間をかけて下りていくという姿とか。

ここにたまたま乳母車を押している人がいますが、十数段の階段を1つ1つ、乳母車を押し上げていくという、非常に

大変な状況を垣間見ることができます。ヴェネチアは、決して人に優しい町ではないなと実感した

わけです。おそらく宅配の値段も相当高いだろう

と勝手に想像しています。

4. 王国の首都、街の一体化、民族の思潮

中央ヨーロッパのチェコにプラハ、ハンガリーにブダペストの町がありますが、橋が町の両岸

の絆を非常に強くしているという実例です。

1) プラハ・ヴルタヴァ川の橋

プラハの町は、西側のプラハ城がある王宮のゾ

ーンと、東側のいわば庶民の町、ここは昔は城壁

で囲まれていたのですが、それを結ぶのがカレル

橋です。非常に立派な石橋です。この橋によって、

両方の町が一体化した、一つの町として成り立

っているわけ

です。カレル橋という

のは、カレル1世とい

うチェコの英雄的な王様の名前ですが、神聖ロー

マ皇帝にも就任したことがあって、チェコが力

を持った時代です。その王様が初めてつくった橋



カレル橋(1402)

完成したのは亡くなってからのようです。

橋の上に建っている30体の像は、キリスト教

の聖人です。これは比較的新しくて、

17世紀ごろに建てられたもので

す。

プラハの町は、その後いくつか

の橋が架けられます。吊り橋が多

く架かっていたようですが、19世

紀から20世紀の初めにかけて、立

派な石橋が架けられています。



ナボムツキー像(1683)

パラツキー橋という橋には、いろいろな種類の石が使われていまして、今はもう汚れて見分けがつかないのですが、青の花崗岩、赤の砂岩、白の大理石で橋が構成されています。つまり、チェコの国旗の青と赤と白で構成されているので、国旗をイメージしているといわれています。



パラツキー橋(1878、1950 改造)

軍団橋は、できたときはフランツ 1 世橋と、ハプスブルク家の皇帝の名前を取って付けた名前でしたが、その後、第一次大戦後に軍団橋という名前に変わります。ナチスドイツに支配されていた時代は、スメタナ橋といわれて、第二次大戦後はまた軍団橋と変わって、社会主義政権になって、5 月 1 日橋に変えられます。また、ビロード革命ののち軍団橋という名前に復活していきます。このように、政治体制によって橋の名前が次々と変えられるのは、非常に運命的な出来事だと思います。



軍団橋

チェコは、アールヌーボー様式の建築がかなりたくさんあって有名ですが、パジージュスカ通り（パリ通り）に通じている橋で、チェフ橋があります。これもアールヌーボーの橋です。



チェフ橋(1908)

アールヌーボーの時代の次に、チェコキュビズムの時代というのがあります。チェコではチェコキュビズムの建築物がたくさん見られるわけですが、橋にもその影響がありまして、20 世紀に入りますと、アールヌーボーの次にキュビズムの影響を受けたデザインの橋がけっこう架けられます。

マーネス橋などを見ると、20 世紀の初めころは何となくアールヌーボーの様式を残しておりますが、だんだんキュビズムの影響の強いデザインになってくるのではないかと思います。



マーネス橋(1914)

フラーフカ橋は、戦後に架けられた橋で、

キュビズムの極地と言ってもいいようなデザインとも言えますし、このころは社会主義体制でしたので、社会主義体制好みのデザインと言えるかも知れません。非常に簡素なデザインの橋です。



フラーフカ橋(1962)

## 2) ブダペスト・ドナウ川の橋

ブダペストは、プラハと同じように、王宮の街と庶民の町がドナウ川で分断されていたのですが、もとはブダとペストという町、もう一つ、オーブダという町がそれぞれ独立した町でしたが、19 世紀半ばにセーチェニ鎖橋が架けられたことによって、兩岸の町が一体化してブダペストという都市が誕生しました。

セーチェニ鎖橋については、セーチェニという貴族が架橋運動をして、私財をなげうって橋の建設に奔走しました。イギリスへ行って、若い設計技術者を



セーチェニ鎖橋(1849)

招聘し、工事関係もイギリス人がやっております。セーチェニさんは、その後の政治闘争に敗れて、残念ながらこの橋の完成を見ることができなかったといわれています。

この橋が架けられて以降、次々と橋が架けられていくわけですが、ハンガリーはオーストリアのハプスブルク家の支配下にありまして、オーストリア・ハンガリーの二重帝国といわれた時代に一定の繁栄をするわけです。そのときに架けられたハンガリーアールヌーボーの典型的な橋、フェレンツ・ヨーゼフというハプスブルク家の皇帝の名前が付けられた橋が完成しております。



フェレンツ・ヨーゼフ橋(1896)

その王妃の名前が付けられた橋もあります。エルジェーベトは、イギリス名で言うとエリザベスです。これは、のちに架け替えられてしまったのですが、非常にクラシカ



エルジェーベト橋(1964)

ルな吊り橋でした。

ハンガリーのブダペストの人々はこの王妃を非常に気に入っておりまして、橋が架け替えられてもエルジェーベト橋と名前を受け継いで、いまだに使われていますが、一方、皇帝のほうは、橋は昔のとおり復元されたわけですが、名前は消してしまって、自由橋という名前にしております。あまり王様のほうは人気がなかったようです。

時代が進むにつれて、戦後、ブダペストにも街を取り囲むように環状道路が整備され、新しい近代的な橋も完成して、近代都市が形成されるようになります。

## 5 運河の橋

ヨーロッパの都市は、湿地帯を開発して運河をつくって町をつくっていったという町がいくつかあります。当然日本もそういう町がありますが、その典型的な例をいくつかご紹介します。

### 1) サンクトペテルブルクの橋

サンクトペテルブルクの町は、ロマノフ王朝が首都として一から建設した町です。なかなか面白い橋があります。

ライオン橋と銀行橋は、小さな歩道橋ですが、運河に架かった橋で、私は個人的に大変気に入っております。



ライオン橋 (1826)



銀行橋 (1826)

ライオンの像が飾られた橋というのは、いくつかあります。大阪にもライオン像を飾った橋がありますが、これは構造の一部を成しているのが特徴です。口でがっちりとしてロープをくわえておりまして、像がアンカーの役割を果たしているということで、非常に珍しい橋です。単に飾りではなくて、構造物の一部と成るように考えられているということで、非常に気に入った橋の1つです。

サンクトペテルブルクにはたくさんの橋がありますが、古くはこういう可動橋も架けられました。現在はほとんど見ることはできませんが、記念に残しているところもあります。



ロモノソフ橋 (1785)

19世紀から20世紀にかけては、非常にきらびやかなデザインの橋が架けられます。まさにロシア好みと言えます。

エルミタージュ美術館は元は王宮でした。あの王宮をご覧になった方は感じられたと思いますが、まさにきらびやかな装飾が施された王宮です。それと同じように、橋の塗装にも淡いグリーンと金色をふんだんに使っています。本物の金ではないにしても、金色を使ったデザインの橋がかなりたくさん見られます。

ネヴァ川にも20世紀には次々と近代的な橋が架けられています。一部が可動橋になっていて、現在も夜になると跳ね上げて、車をシャットアウトして船を通すということをやっています。

数年前にテレビの番組で、早朝の風景を写しておりましたが、そこで、男の人が眠そうな顔をしてインタビューに答えておりました。今から家に帰るのだと、昨夜、橋の跳ね上げに間に合わなくて一晩こっちで過ごしたと言っていました。酒を飲み過ぎて、家に帰る時刻を忘れてしまうと、



明日の朝まで帰れないことが起こるようです。



トロイツキー橋 (1903)

ここに PONT EIFFEL というレストランの看板があります。このすぐ横のトロイツキー橋というのは、エッフェルが設計したのかと思いましたが、エッフェルはコンペには参加したようです。

が、当選はできなかったようです。

### 2) アムステルダムの橋

アムステルダムの街は、ご承知のとおり運河が扇状に町を取り囲んでおります。古くは舟運のためにオランダの典型的な跳ね橋を架けておりましたが、近代都市として生まれ変わっていくために平らな鉄の橋が増えてきまして、跳ね橋とかレンガのアーチ橋はだんだんと数が減ってきています。しかし、町の景観を守るために、最近ではできる



ドリーハーリンゲン橋

ところには跳ね橋とかアーチ橋を復活させることにも力を入れてやっています。

ドリーハーリンゲン橋は、新しい橋ですが、

「3匹のニシン」という意味だそうです。

オラニェ橋という鉄製の跳ね橋です。



オラニェ橋(1898)

アムステル川が町の中心を流れていますが、これにも古い橋、新しい橋、いろいろありますが、全部一径間が跳ね橋になっております。

近年、アムステルダムは港湾地帯を再開発して、新しい住宅地等が生まれているのですが、その周辺には近代的なデザインの橋がかなり架けられており、オランダのデザイン力の高さを示しています。



エネウス・ヘルマ橋(2001)

あといくつか用意しておりましたが、本日はこれで終わりにしたいと思います。